

「夏休みが終わるまでに新聞を毎日読む習慣を見につけて考える力を自ら育てよう」

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

開倫塾では、2003 年 6 月より「開倫塾 15 の躰(しつけ)」の 1 つとして、塾生全員が「新聞を毎日読む」習慣を身につける考える力を自ら育てる運動を塾を挙(あ)げて推し進めております。そこで今日は、なぜ新聞を読む習慣を身につけるかが塾生にとって意味があるのかをごいっしょに考えてみましょう。

2. 新聞を毎日読む習慣を身につける意味とは...

国際連合(United Nations ユナイテッド・ネーションズ)は、2003 年から 2013 年までの 10 年間で「国際識字の 10 年」(United Nations Literacy Decade ユナイテッド・ネーションズ・リテラシー・ディケッド)として、世界の識字率(しきじりつ)向上をはかるための 10 年間としました。

識字率(しきじりつ)とは、読み書きのできる人の割合を言います。世界には、読み書きのできない人々がまだ何億人も存在します。

ところで、文字が読め、文字が書けることの意味を皆様はお考えになったことがありますか。この答えを考えるとときには、文字が読めず、文字が書けないときの生活を思い浮かべてみるとよいかも知れません。

文字が読めず、文字が書けないことは、自由に移動すること、自由に学ぶこと、自由に仕事を選ぶこと、自由に他人の考えを知ること、自由に自分の考えを発表すること、自由に手紙やイー・メール(e-mail)をやりとりすること、自由に契約を取り交わすこと、自由に営業すること、自由に投票すること、自由にみんなの代表者として立候補すること、自由に政府や地方自治体・国会や地方議会に対し意見を述べること。自由に裁判を受けることなど「自由に行動すること」を妨げることを意味します。

文字が読め、文字が書けることは、以上のような「自由」を現実のものとする事と考えます。自由を限りなく広げるものが読むことのできる力、書くことのできる力、つまり読み書き能力があります。読み書きのできる能力のある人の割合を「識字率(しきじりつ)」といいます。これから 10 年の間に世界の識字率を大幅に上げようという国際連合の取り組みが「国連識字率向上の 10 年」の取り組みです。

読み書き能力が十分にあるかどうかを判断する 1 つの基準が、「新聞がスラスラ読めるか」であります。新聞が家の中に置いてあっても、それがスラスラ読めなければ、読む力が十分にあるとは言えません。「読める以上の内容が書けたり話せたりすることは少ない」と考えられますので、「内容のあることを書いたり、話したりすることの前提は、新聞がスラスラ読める力を身につけ

ることである」とも言えます。新聞は読み書き能力つまり識字率を向上させるもっともと有力な道具(tool ツール)の一つであります。

「国際識字率向上の10年」の取り組みの一つとして、開倫塾では新聞を「毎日読む習慣を身につけ考える力を自ら育てよう」の運動を展開しています。

*開倫塾は、「開倫ユネスコ協会」の設立母体となり、「人間の安全保障」(Human Security ヒューマン・セキュリティ)の推進を基本理念に活動を展開しています。どのような状況のもとでも生き抜くことができるよう一人ひとりの力をつけることをエンパワーメント(empowerment)と言います。力をつける(エンパワーメント)ために最も大切なことの一つが読み書き能力を身につけることと考えます。学校の教科書である程度基礎学力を身につけた上で、新聞を読み込むことにより読み書き能力を更に高めることができます。新聞を毎日読む習慣を身につけることは、読み書き能力を高め、一人ひとりが力をつけること、エンパワーメント、人間の安全保障を促進させます。このような理由で人間の安全保障の推進を基本理念に設立された開倫ユネスコ協会でも大いに奨励したく思います。

高校卒業後の進路として、7割以上の方が短大、専門学校、4年制大学など所謂(いわゆる)高等教育機関と呼ばれる上級学校に進学するといわれております。開倫塾に現在在籍する小学生、中学生、高校生、の大多数の方々が、短大、専門学校、4年制大学など高等教育機関に進学すると予想されます。

さて、現在の大学等の高等教育機関の最大の問題に「学力不足問題」つまり、大学等の高等教育を受けるに値するだけの基礎学力が身につけていないで入学してくる学生が多いという問題があります。「せめて、新聞だけでも毎日きちんと読み、現代の動きを知りながら物事を幅広く考える学生に入学してもらいたい」と願う大学の先生がいかに多いか。

そこで、将来高校卒業後、大学等に進学するのが大多数の塾生であるならば、小学生、中学生、高校生のうちから、新聞を読む習慣を確実に身につけ自ら考える力を少しでも育てた上で大学等に進学し、学力不足などと言われることなく思い切り能力を開化してもらいたいと開倫塾では考えます。

大学教育に耐えられる学年相応の基礎学力を小・中・高校の内から確実に身につけて頂くことの中に、新聞を毎日読む習慣身につけ、自ら考える力を育てることを入れたのは以上のような理由からです。

日本は世界でも類(たぐい)まれなレベルの高い新聞が毎日家庭や職場に配達される国数少ない国の一つであります。

日本の新聞の水準つまり内容は極めて高く、日本のどの新聞も世界の最高級紙と言われるレベルド・トリビューンや、フィナンシャル・タイムズ、ニューヨーク・タイムズなどにも内容の面が劣りません。時代を読む眼、記事の正確さ、コラムや論説のレベルの高さ、国内のみならず国際関係、経済関係、芸術、文化、家庭、教育、スポーツ、社会、地方版どれをとっても世界の最高級紙と肩を並べるか、それ以上の内容です。

これは、新聞をつくり上げる人々の力、立派な新聞をつくることによってこの国や社会、人々

の生活をよくしようという使命感によるだけでなく、読者である日本国民の新聞をこよなく愛する心とどんな難しい内容も理解しようという旺盛な知的好奇心の賜(たまもの)と私は考えます。

世界最高水準の内容の新聞を、日本国中の人々が丹念に毎朝読むこの日本という国は、それだけで文化の水準の高さを意味します。問題は多いかも知れませんが、過去 50 余年間、戦争のない平和な社会が続いているのも、経済はどん底とは言え、ある程度社会秩序が保たれているのも、国民の平均寿命が世界一高い状況にあるのも、新聞により国民の一人ひとりが、政治に対する高い批判精神、規範意識、健康に対する基礎知識を知らず知らずの内に身につけていたからあると私は確信しています。

新聞を読むことにより、世界を広く、深く知り知性が磨かれ、感性が呼びおこされ、創造力が育てられ、生きる喜びを見出すきっかけをつかむことができます。

そのような人類の英知の結晶、日本の誇るべき「宝物」のような新聞が毎日配達されることに感謝をしながら、家族の方が目を通した新聞を一日の終わりか翌日に、じっくり目を通す習慣を身につけることは、果てしない可能性を子どもたちに与えるものと確信致します。

3. おわりに

開倫塾では、「開倫塾 15 の躰」の一つとして「新聞を読む習慣を身につけ考える力を自ら育てよう」の推進運動を、6 月だけに推進するのではなく開倫塾では年間を通じての次のようなプログラムとして取り組みたく考えます。

実際に新聞を毎日おつくりになっている各新聞社の記者や編集者の方を開倫塾のできるだけ多くの校舎に講師としてお招きし、直接お話を伺うことにより、塾生の新聞への理解を深め、興味、関心を強めて頂こうと考えております。

又、開倫ユネスコ協会主催の第 4 回エッセイコンテストのテーマである、「新聞を読んで考えたこと」にできるだけ参加し、夏休みに新聞を読む習慣を身につけるために活用して頂きたく考えております。

どうかご家族でもお子様が新聞を少しでも読むようになったらほめて頂くようお願い申し上げます。お子様にとってためになる記事等がありましたらお子様にもご紹介頂きたくお願い申し上げます。

参考 まだに私が以前書いた文章を最後に紹介させて頂き、本日のお話を終えたいと思います。

参考 「夏休みには 1 日 1 時間 新聞を読もう」

1. はじめに

2004 年までもう 5 カ月。世界も日本も、どんどん変化しつづけています。世の中がどのように変わっていくのか、どんどん変化していく世界や日本の中で、自分自身としては、どのように生きていけばよいのか。

世界や日本の変化を見ながら、自分自身の生き方を考える「ヒント」になるものは、いろいろあります。

その有力な手段の1つとして、「新聞」があります。

ほとんどの家で、新聞を購読していると思われるので、今回は「効果の上る新聞の読み方」を考えます。

2. 夏休みには、1日1時間 新聞を読もう

今まで TV 番組やスポーツについてのページとマンガしか新聞に触れなかった人も、今年の夏休みは最初のページである「1面」からていねいに1ページずつ読めるところまででいいですから、1時間の時間をかけて、新聞を読みすすめることをおすすめします。

「1面」には、その新聞社が世の中でおこっている出来ごとのうち、読者に知らせるべき内容で、今1番大切であると判断したものが、掲載されています。「1面」の下の方にある「コラム」は、その新聞社で、最も筆が立つ記者を経験した「論説委員」の人たちが何人かで執筆しています。

「1面」の左側には、その新聞社で、現在最も取り上げたい問題が、シリーズものの「特集」の形で取り上げられています。

ページを少しめくると、大事な問題についてのその新聞社の考え方を示す「社説」があります。新聞社に入ってくる世界中、日本中の情報をまとめあげ、世界や日本の問題の中で新聞社として「きっちり」意見を述べる必要がある問題について、何人もの論説委員の議論をふまえて新聞社の意見として、書き上げられるのが「社説」です。新聞は何のために読むのかという問いに、「社説」を読むためだと、答える人がいるのも、そのためです。

「政治」や「経済」「社会」のページの他に「国際」のページもあります。是非、塾生の皆様は、「国際」のページをたねんに目を通して世界ではどのようなことが起こっているのか、その基本的なことを理解して下さい。「国際」のページは「地図帳」をたえずそばにおいて、地名や位置を確かめながら読むと興味も増します。

少し勉強のすすんだ人は、お金をため「週刊の英字新聞」や「日刊の英字新聞」を家で購読することを「心から」おすすめします。早目に「英検準二級」や「二級」を取得し、日本語の新聞を1日1時間読んで、内容がよくわかったら、英字新聞を1日1時間読むことを高校生や大学生になったら、実行することも「心から」おすすめします。

3. おわりに

ただし、新聞を読むことは大切ですが、新聞に書いてあることが世の中でおこっているすべてではないことを知ることも大切です。新聞やジャーナリズムの任務は「問題点とその原因を徹底的に明らかにすること」にあります。ですから、問題になっていないこと、このままでも OK なことは新聞には余り取りあげられません。

世の中で行われていることや、おこっていることの大部分は新聞には取りあげられないこと、問題にすべきと新聞社が考えることのみ新聞には取りあげられることを理解することもお忘れなく。

それでは、がんばって1日に1時間、夏休み中新聞を読んでみましょう。がんばって。

2003年6月24日記